

## 書評

## 星の来る夜

ペルチャー著、鈴木圭子訳

(地人書館、昭和60年10月1日発行、定価1600円、318頁)

レズリー・ペルチャーという名前を御記憶の方も多と思います。彼はコメットハンターとして12回の彗星を発見しただけでなく、10万個をこえる膨大な量の変光星の光度観測を残しました。かのハロー・シャープレイは、彼を「世界で最も偉大なアマチュア天文家」と称賛したほどです。

この本は、20年ほど前にアメリカで出版された彼の自伝「Starlight Night」の邦訳です。

この本を手にとる人の中には、彗星捜索のコツや彼の見つけた彗星に関する発見事情などを期待する人もいるでしょう。天文をかじった人間であれば、ペルチャーの自伝というからには「発見記」のようなものだろう、と思ってしまうがちです。しかし、実際にはたまたま星というものに魅かれた一人の男の自然観を書き綴ったエッセーといった方がふさわしい内容です。

開拓時代の勾の残るオハイオの農場で生まれたペルチャーが、その生活の中でまわりの自然をどのように感じとって成長していったかが、カントリーソングの似合いそうな美しい情景描写の中に生き生きと描かれています。もちろん、彼が星に興味を持つきっかけや、それがどのようにしてあれほどの偉大な業績につながったかも詳しく述べられています。

印象深いのは、ペルチャーという人物が星に限らずいろいろなものに凝っていたということです。それが昆虫だったり、鉱物だったり、あるいは考古学だったりするのです。それもすべて彼の育った自然環境が土台になっているわけですが、その環境が近年著しく変化していくことを嘆きながら、この本は終わっています。近年といっても20年前ですから、さらにこの20年間の変化は彼にとってもっとひどいものだったにちがいません。

翻訳は、ペルチャーの性格を反映してか、たいへん凝っています。表題を「星の来る夜」としたことからもうかがえるでしょう。もちろん本文中に専門用語が出てきますが、訳者はかなり注意を払って訳しており、天文学を心得た人ならではの、と思うほど丁寧です。その点、天文を知っている人でなくても、安心して勧められる本になっています。

(渡部潤一)

## 力学への招待

——微積分の基礎から彗星の運動まで——

池田和義著

(現代数学社、和昭60年9月20日発行、定価1900円、140頁)

本書は、これから力学を学ぼうという人たち、あるいはもう一度力学を学んでみたいという人たちのために書かれた力学の入門書で、「Basic 数学」に12回連載された力学の解説記事を一冊にまとめたものである。内容は大学の教養程度で、数学的な記述よりもむしろ物理的な意味内容に重点がおかれている。

微積分やベクトルの基礎概念から解説されているので、高校生程度でもあるいは読破出来るものと思う。

構成は、ベクトルの微積分から始まってエネルギーの概念までが10章、天体の運動についてが2章となっている。天体力学まで言及しているのが本書の大きな特色である。

前半部では力学の基礎概念をかなりしつこくかみ砕いて解説してある。特に作用・反作用の法則の解説に多くのページをさいており、力学の中で果たしている役割が詳しく述べられており面白い。

最後の二章は、二体問題を解いて軌道を求め、楕円、放物線及び双曲線各々の語源から幾何学的性質、ケプラー要素までよくまとまって解説されている。

本書の最後に、日本書紀に記されている日本で最初の彗星の記録について、著者の仮説が述べられている。西暦634年とその翌年の記録を同一の彗星と仮定し、その軌道を推定している。いささか唐突な印象も受けるが、数少ない手がかりから彗星の軌道が求まっていくのは、なかなか見事で、歴史に興味を持つ読者にはわくわくするようなユニークで楽しい記事である。ただ、仮定を多く設けて彗星の軌道を決定するよりは、可能な軌道の領域を示した方が良かったのではなからうか。

随所で前著「数式を使わない力学」(講談社ブルーバックス)を参照しているのが煩わしかった。これだけ頻繁に参照するのであれば、まとめて一冊にすべきで、自己完結性にやや欠け、おしいと思った。

(仙石 新)